

平成30年度第1回米子市総合教育会議録

○日時

平成30年8月29日（水）

○場所

米子市役所第2庁舎2階第2会議室

○議題

- (1) 教育と福祉の連携について（5歳児健診の実施及び切れ目ない支援体制の構築）
- (2) ふるさと教育について
- (3) 教職員の多忙感の解消について

○出席者（欠席者なし）

市長 伊木隆司

教育長 浦林実

教育委員 金山正義

教育委員 上森英史

教育委員 荒川陽子

教育委員 杵村由紀子

○出席職員

総合政策部長 大江淳史

総合政策部次長兼総合政策課長 八幡泰治

総合政策部総合政策課まちづくり戦略室長 倉本樹

総合政策部総合政策課主任 宮本朋子

福祉保健部長 斉下美智子

福祉保健部次長兼こども未来局長 景山泰子

福祉保健部こども未来局こども相談課長 橋尾宏紀

教育委員会事務局兼教育総務課長 松下強

教育委員会事務局主査兼教育総務課教育企画室長 松浦俊介

教育委員会事務局次長兼学校教育課長 金川朋史

教育委員会事務局生涯学習課長 片岡忠紀

教育委員会事務局学校給食課長 山中敦子

○傍聴者数：3人

○報道関係：3社

※読みやすさ等のため、発言の趣旨を損なわない範囲で、重複表現、言い回しなどを整理しています。

○八幡総合政策課長

会議の開催に先立ちまして、事務局よりご報告を申し上げます。

本年4月の組織機構改革に伴い、この会議の事務局が教育委員会教育総務課から総合政策部総合政策課へ変更となったことをご報告させていただきます。

本日の議題につきましては、「教育の振興を図るために講ずべき重点的な施策」ということで、一つ目に今年度スタートした「5歳児健診と切れ目ない支援」、続きまして地方創生において重要であると考えられております「ふるさと教育」について、そして現在教育現場で課題となっている「教職員の多忙感の解消」、この3つの議題を用意させていただきました。

それでは、ただ今から、平成30年度第1回米子市総合教育会議を開催いたします。

議事までの進行につきましては、総合政策部の八幡の方で進めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

では、米子市長がごあいさつをさせていただきます。

○伊木市長

あらためまして、おはようございます。本日は、本年度第1回の総合教育会議のために、お集まりいただきまして、本当にありがとうございます。また、教育委員の皆さんには、日頃より米子市の教育行政について、様々な形でご意見をいただき、またご理解とご協力をいただいておりますことを、この場をお借りしましてお礼を申し上げます。

今日の第1回は、4月に浦林教育長をお迎えして初めての回となります。総合教育会議が国の方で定められた一番のきっかけは、大津市でのいじめ事件であると認識しております。やはり、教育委員会と市長部局とは適切に連携をしていくということが、様々な教育行政を進めていくうえで、大切であろうという大きな趣旨のもと、この総合教育会議が開催されています。

本日は3つのテーマを用意させていただいておりますけれども、それぞれ大切なテーマだと思っております。本日はこの3つのテーマを軸に、忌憚のない意見交換を皆様方とさせていただきます。米子市の教育行政がますます発展していくことを祈念いたしまして、私からの冒頭の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○八幡総合政策課長

ありがとうございました。

続きまして、教育長よりごあいさついただきますと思います。

○浦林教育長

4月から教育長になりまして、米子市のすべての子ども達を最大限に成長させるという目標をもって頑張ってきております。そのために、新たなことを取り入れるということもありますし、これまでやってきたことを見直しながら進めていく、PDCAと言われますけれども、こういったことを丁寧にやりながら、より効果的な方法は何なのか、どうすればいいのかということ、常に考えていきたいと思ってやってきました。

今日は市長さんや教育委員の皆様と意見交換をしまして、また新たな気づきをいただき、目標を新たにしながら、精いっぱい頑張って、米子市の子ども達を最大限に伸ばせるような、米子市の教育に繋げていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

○八幡総合政策課長

ありがとうございました。議事の進行につきましては、市長の方でよろしく願いいたします。

○伊木市長

最初のテーマですが、「教育と福祉の連携について」を上げさせていただきます。この4月から米子市は、5歳児健診を開始することといたしました。5歳児健診によりまして、子ども達の様々な発達についての不安等をできるだけ早期に発見し、解消していこう、そのような趣旨が込められています。

しかしながら、そこで大切になることが、単に5歳の時点で診断をして、それで終わるということでは決してなくて、診断の結果に基づき、適切な療育あるいは教育に繋げていくということです。これなしには5歳児健診をやる意味はないと私は思っております。

つまり、これまでも子どもの発達についてはいろんな形で、さまざまな発見がされてきましたけれども、往々にしてありがちなのは、発見して診断が下されたら終わり。終わりという言い方が乱暴かもしれませんが、親の立場からすると、ショックを受けて、否定を試みたりという事例もあったと伺っています。

やはり診断を受けた後に、適切な療育が受けられ、そして二十歳くらいになるころには、自立した社会生活が送れる、そういったバックアップ体制があるから5歳児健診が活きると思っております。そのあたりの体制について、資料によって現状を見ながら、皆様方から意見をいただけたらと思っております。

まず、事務局の方から資料の説明をお願いします。

○景山子ども未来局長

それでは資料1について説明させていただきたいと思っております。

先ほど市長の方から、5歳児健診の趣旨について説明があったところでございます。今まで米子市は、5歳児の検診については手上げ方式で、希望者に対して行っておりましたが、このほど全数を対象とした健診として30年度から実施することになりました。

局の重要な使命でもあります、児童の発達支援の充実、それから子どもの総合相談というところが、市長の公約にも掲げられておまして、今年度からスピーディーにそれを実現する運びとなったところでございます。

目的は、先ほどからの話にもありますとおり、診断を下すことが目的ではなく、早くに支援につなぐこと、そしてスムーズに就学支援をすることでございまして、保護者の困り感に寄り添った流れになっております。具体的には米子方式といたしまして、5歳児になられる方全員に対して、年4回に分けて実施いたしますが、まずはアンケートを保護者の方に送付いたしまして、育児の困難さ、それから強みについてもアンケートを実施しまして、そのスクリーニングによって、必要に応じて二次健診にご案内し、教育相談や育児相

談、それから心理・発達相談など必要な支援に結び付けていくという流れになっております。

今のところ、1回目が終わりました、2回目も一次が終わっているという現状ですけれども、実施状況の1回目をご覧いただきますと、二次検診の対象者が62人おられまして、そのうちの希望者が23人ございました。希望されない方の中には、すでに療育や医療に繋がっておられる方がありますのでその方を除きますと、今のところ保護者さんに困り感がなくご希望されないというご家庭が見受けられます。

今後の課題についてですけれども、希望されない方への働きかけ・啓発というところが一番大きな課題となっております。そして当事者さんだけではなくて、その周辺のお子さん方、保護者さん方、関係者の皆さんに、発達の課題のあるお子さんに対する理解についての啓発が、また併せて重要な課題と捉えておりまして、これからしっかりと取り組んで行きたいと考えているところでございます。

そして、5歳児健診は年中時になりますので、時間をかけてじっくりと保護者さんお子さんに関わることで円滑に就学に繋げていくことを、常にしっかりと見据えて取り組んでいきたいと思っております。

○金川学校教育課長

資料2切れ目のない支援体制整備ということで進めさせていただきます。

小学校から中学校への移行に伴うさまざまな課題、いわゆる小中ギャップということが全国的に言われた最中に、米子市版小中一貫教育がスタートしました。この取り組みによりまして、中学校区の小中の交流が盛んになりました。学習や生活の規律を標準化することで、小学生が中学校入学に対する不安感が減少してきたという現状が今あります。それから、児童生徒に関する情報共有も密になり、課題になってきたことが、かなり解消されてきています。

今、このような課題が、幼保から小学校への移行期でも出てきております。現在、全国的にも小1プロブレムということが言われております。米子市も例外ではなく、小学校低学年でいろいろな課題が出現しております。この解消のためにこども未来局と学校教育課が連携し、資料2にあります1の(1)、(2)のような取組を今年度実施してきております。これ以外にも今の5歳児健診に関わりますが、発達障害に関わる課題、それ以外にも家庭環境でありますとか、幼保と小学校のカリキュラムの接続の部分、その辺の課題を解消するために、1(3)でお互いに小学校の教員、幼保の教員これがお互いを知り、スムーズな移行というのを進めております。そのために3(3)にあります就将小学校区で、いまこういう事業を進めております。これをモデルにして、来年度よりこれを全小学校区に広げて、スムーズな移行へと考えております。

○伊木市長

ただ今の説明について、ご意見、ご質問がありましたら、委員の皆さまどうぞ。

○金山委員

議会でもいろいろ質問をされて、そのなかで、回答されている部分はかなりありますの

で、関連するかもしれませんが、私個人的な考えを今日は述べさせていただきたい
と思います。まず、機構改革で特に教育の連携という部分が生涯学習・文化・体育と新た
な進展を見せておりますけど、ここは福祉保健部との連携について、ということでござ
いますので、例えば今こども未来局との連携がございましたが、やはり教育とこども未来局
というのは密接に関係していなくなくてはならないと思います。ご存じのように、虐待、
貧困あるいは発達障害、支援が必要な子どもが大変増えているような状況の中で、この5
歳児健診をもれなくということについては、非常に評価しているところでございます。

そういったなかで、幼保の園はすべての園でやっているということで、素晴らしいこと
だと思いますけれども、是非もれがないようにしたいな、ということと、校長先生方の
思いと密接につながっていけるような体制ができればと考えているところでございま
す。

○伊木市長

「もれなく」というご意見がありまして、アンケートの返送者が86.4%となってい
ます。未返送者には再勧奨をしてフォローしているということですが、送ってこない
14%に何か問題がありはしないかというのが、当然お持ちの疑問ではないかと思っ
ております。そこにつきましては我々としても、できる限り園からの呼びかけなどを願
いしているところでございますけど、こうしたところは、より充実していけるよう
に努力をしていきたいと思っております。

○金山委員

それと関連してですね、人員の、例えばこども未来局から家庭に赴く支援が足りて
いるのかどうかですね、そういったあたりで、ほんとに米子市は増やしていただい
とって、ありがたいことだと感じております。そういったなかで、利便上いかなもの
かなと、家庭訪問が足りているのかどうかを聞いてみたいと思います。

○景山こども未来局長

金山委員には校長先生時代からお世話になっておりまして、特に虐待が疑われる
児童への家庭訪問についてということで、今ご質問をいただいたというふうに捉
えていますが、当時からいたしますと、人員の方は増えておりまして、特に専
門員ですね、相談員の充実というところを図ってきているところです。

相談員は10年前に比べて1人増えておりますが、その他にも機構改革により
まして、総合相談窓口が設置されましたので、それ以外も相談対応職員が今
年度から多くなりまして、そういった点では充実してきているというふうに考
えております。

○金山委員

そのことを、私もありがたくお聞きしてですね、少なかった頃と比べて手厚
くなってきたなど、本当にありがたいと思っております。

○伊木市長

そのほか、ご意見ご質問等ございませんでしょうか。

○荒川委員

5歳児健診をしていただくことは、保護者にとって、とてもありがたいことだと思って聞いております。ただ、アンケート結果が返ってこないことについて、アンケートの見直しと言いますか、子育てをしていると、案外どんな小さなことでも煩わしかったり、簡単なことでも、つい、子どものことですか家事のことに気が行って提出ができないこともあります。

アンケートを作っていただく視点を子育て中のお父さん、お母さんの視点に合わせていただくと嬉しいなと思うのと、アンケート未返送者の方について、園でも声掛けをしているということでしたが、園に行っておられない方があるんじゃないかという心配があったりですとか、2次健診の対象者で受けておられない39名の方の中についてはすでに療育にも繋がっている方があるということでしたけれども、100%繋がっておられるかどうか心配だなというところで、声がかからないところでどうやって声を掛けていく、情報を出していくかというのがすごく重要だと思うので、そのあたりを是非よろしく願いしたいなという風に思います。

○景山こども未来局長

返送されない方につきましては、園に巡回しております、園の様子を拝見しながら保育士の先生方などに話を聞いて、保護者さんへのアプローチを含めて、相談したり考えたりということで進めております。

アンケートについてなんですけれども、国が発達の課題を洗い出すためのアンケートという決められたものがございまして、かなり短時間で書いていただけるようなもので、負担感は比較的少ないのではないかと思います。むしろ封書が来て、そこを開けるとところからの億劫さというのは確かにあると思いますので、そこは地道な啓発、それから声掛けかという風に考えております。

あと、園に行っておられない方というのは、年中さんになりますと人数が少ないようで、50人にも満たないような人数になるそうです。そこのご家庭についてはご家庭にご連絡を取ったり、家庭訪問をするなりして再勧奨を行うようにしております。

いずれにしても、ご返送のない方、それから課題がある方でご希望されなくて、医療に繋がっておられない方への働きかけというのは、引き続き大きな課題として捉えて取り組んでいきたいと思っております。

○杵村委員

教育と福祉の連携についてということで、これは昔からの課題でして、それがこういうふうに、伊木市長さんになられて、この行政の機構改革の利点の一つだと捉えております。私たち保護者からすると、学校教育に相談するのではなく、米子市さんに相談したい、問題として捉えていただきたいと考えており、この制度は私たち親にとっても、市民にとっても、ありがたい制度だと思っています。

鳥取県のキャッチフレーズではありますが「子育て王国とっとり」、その中の米子市ですので、子どもを産み育てるなら米子だということで、大きな枠で捉えて政策に反映して、

これから2番3番の議題にも繋がっていくと思いますが、一体として考えるということが重要だと考えています。

5歳児検診をやり始めたところですが 小学校・中学校に見学訪問させていただく中で、この子はもう少し小さい時に手を差し伸べてあげることができなかったんだろうとか、学校教育・福祉の部分でももう少し連携がとれるのではないかと、ということをいつも感じながら教室に入っております。

ここにこサポート支援事業がございます。サポートが必要なお子さんに対して、どこまで行政あるいは教育が手助けしてあげられるかということで、もちろん人員も予算も限界がありますが、それぞれ工夫の上で、ギリギリのところで行っているけれども、トータルに子育てを考えた場合に、必要な予算は付けて、米子で子どもを育てたい、米子の学校に行かせたい、そんな状況になったらいいなと少し話がずれるかもしれませんが思っています。

○伊木市長

鳥取県はおっしゃるとおり「子育て王国」を標榜しております、私たちもその鳥取県の中の一構成市町村でありますので、やはりこの同じベクトルで目指していきたいと思えます。全国を見渡せば、産み育てにくい地域というのはあるんだろうと思えます。そうしたなかで、米子は本当に子どもを育てやすいという印象を持ってもらいたいと思えますし、そのためには具体的な制度として、いろんなものが充実している。その一環としてこの5歳児検診があり、そしてその後、様々な支援体制があるということ。これをやりながら、課題を見出しながら、クリアしていったり作り上げていきたいと思っております。

○上森委員

5歳まで、小学校まで、中学校まで、といった区切りではなくて、切れ目のない子どもの支援体制をとっていくということで、本当に良いことを機構改革の中でしていただいたなという風に思います。

また、切れ目ない支援ということですが、平成22年に小中一貫教育ということが鳥取県の中でも話題になり、小中一貫校を作るといようなことを全国的にやっていたんですけども、最終的に米子市は平成29年から米子版小中一貫を作るといことで、教育委員会としても取り組んでまいりました。先週でしたか、3回目の米子市小中サミットが開催され、小中の子ども達の連携が根付いてきたと感じました。

今日行政の色々な部署が来られたんですけども、実際に今までは自分のところが、保険課は保険課だけ、教育委員会は教育委員会だけの話で、保護者はどっちに相談しに行ったらいいのかわからなかったところがスムーズにできるようになった。本当にありがたいことですが、その中で、提案としてコーディネーター的なものを作ってもらって、そこに行けばこういう人がおられる、ここに行ったら何ができる、ということを教えてくれる方を作っていただくと、保護者としても、市民としても、安心だと感じます。

○伊木市長

最後の方に言われた相談の体制ですけれども、この4月からふれあいの里にこども総合

相談窓口というのを設置いたしました。ここはどんな相談でもまず伺いますという窓口で、相談に来られたら、解決できるかあるいは解決できる人を紹介する、ということで今動き出しております。まだちょっと認知度が低いというところもありますけれども、これもしっかりPRしながら、あらゆる相談の窓口があるという認識を多くの親御さんに持っていただけるように努力したいと思います。

それから連携のところでお話がございましたけれども、教育委員会は教育のプロの集団だと思っています。その中に様々な課題が入り込んでいるのが今の実情です。そうしたときに、例えば福祉保健部が持っている知見、その中でも良質の知見を教育委員会に提供するというのが連携の大きな筋道かなと思っています。例えば今、ADHDのお話をされましたけれども、誤解を恐れずに私見を申し上げれば、発達障害と名が付いていますけれども、障がいではないだろうというのが、私の個人的な認識です。あるいは強い個性であると。有名な話ですけれども、アインシュタインは自閉症であったと。優れた研究をする人も少なからず自閉症の傾向があると。あまり周りのことを気にしないで没頭できる能力、これは障がいというよりも個性じゃないかという考え方。それと空気を読まずに物事をどんどん進められるという人は、少なからず時代を動かした人の中に含まれる。これは検証しようがないですけれども、織田信長が多動であったと言う話を聞いたこともあります。それを考えると、今は発達障害とって「障害」という言葉をつけてしまいますけれども、強い個性の一環じゃないかなと、そうすると昔の先生っていうのは、何とか抑えてやっていましたけれども、今は体罰で許されませんので、現代版の教育の方法を考えていかなければなりません。

いろんな知見があるということ、その中でも良質の知見をピックアップして、教育委員会に提供し、そして教育委員会の方ではそういった子ども達をどうやって教育していくかということ、改めて研究していただく。そういう役割分担ができれば、より良いものになるかと思っています。例えば、そういう子が大人になってから、自分がそうだとわかった時にびっくりしたと、今まで何で自分がこういうことで悩んでいたのかと、人間関係がうまくいなくて悩んでいたんだろうということが、実はアスペルガーとかそういう症状があったっていうことに気付いて、びっくりしたと言うんですね。これは結構小さいうちに知って、この子の個性だと、先生も含めた周りの大人たちが認識しながら、もちろん友達もこいつはこういうやつだと認識しながら物事が進んでいくような形を作れば、もっと生きやすい社会になるのかなと思っています。その辺りの連携については、より深めて行けるように努力したいと考えています。

○上森委員

早いうちにできる対策が必要だと思います。

○荒川委員

切れ目のない支援体制として、5歳児検診の関係で医療に繋いでいただいておりますが、それが継続的に、どのタイミングでもウィスク検査等が学校で受けられるようになったらいいな、という意見を聞いております。なかなか医療機関に出かけるとなると、難しいこともあります。学校にそういうチャンスがあれば、もう少したくさんの方が足を運べる

のではないかという意見があったことをお伝えしたいのと、切れ目のない支援ということで、資料にモデルが出ていますけど、ああいうふうに一生懸命一人一人に対応していただけるのは、保護者としては嬉しく思っておりまして、こうした取組が広がって行って、小学校に上がりやすい体制を作っていただくことに期待をしています。

○伊木市長

その点も含めて教育長さんの方から、何かこのテーマについてご意見があればお願いします。

○浦林教育長

昔の話になりますけれども、私は8年間学校を離れて教育委員会事務局にありまして、4年前に校長として学校に入らせてもらったんですが、特別支援教育、就学指導がすごく進んだなど、本当にびっくりするぐらい感じました。昔はなかなか保護者に理解していただけなくて、それによって適切な支援が十分にできないということもあったんですけれども、教育行政、幼保小の連携によって、就学指導が進んでいく。

私がおりました学校で、情緒学級に3人の新一年生が入ってきました。昔ではありえなかったことですが、そういった意味では、みんなで力を合わせて進めていくことで、こんなふうになるんだということを実感しました。それから前職は、西部教育局に勤めてありまして、小学校に入ってくる前に、特別支援や生活指導面であるとか、いろんな面で課題があると感じてありまして、何とか保育園と小学校を繋ぐことができないかということで、県の方で事業を起したのが、今就将小学校で受けていただいている幼保小の連携事業でした。それをやっている時に、米子市で5歳児検診が始まるということを知っていて、なんとタイミング良く、と他人事のように見ておりましたら、私が当事者としてみさせていただくことになって、これは私の宿命のようなものだなという風に感じております。

学校側としましては、様々な子ども達の情報を生かした、適切な教育をさらに進めていくということがまず必要になりますし、それから先ほど手紙が返ってこないという家庭、アンケートが返ってこない家庭、そういった家庭の課題というの、これまでは小学校にそのまま何も手付かずとは言いませんけれども、少し不十分な状態であったところもあると思いますので、こういった二つの部分を、小学校側も、就学前側も、共通理解しながら、課題解決に向けて、そしてそこに行政が大きく関与できるという、すごくいいシステムが今出来ているなと感じております。これは絶対握って離さずに前進しなければならないと強く思っております。

それからまた特別な支援が必要な子どもばかりでなくて、多くの子どもに支援が必要だと私は思っておりまして、いま就将の方でやり始めたことを市内全体に広げて、そして小中一貫ということでやってきましたけれども、幼保小中一貫といった長いスパンで、子どもさんを育てていけるようなやり方ができないかと思っております。

課題もいくつか感じてありまして、一つはやはり特別支援という、主に担当している指導主事を一人増やしていただいているところなんですけれども、やはりこの特別支援というのは一言で済むようなことではなくて、非常に幅広くて、いろんなことがあります。

課題を整理していかないといけないところがあるのかなというところがありますし、たくさんの方が情報だけいたりしているわけですが、今の人員の数は変わらないわけで、こういったものを活かすためのスキルアップであるとか、人的配置であるとか、そういったところを視野に入れて行かなければ、せっかくの宝の山が少ししか活かされない、何のためにこれをやったかということになるので、残さず子ども達に還元できるように、教育をしていきたいなというところが私の意見でございます。

○伊木市長

ありがとうございました。続きまして「ふるさと教育」の議題に移りたいと思います。まず事務局の方から資料の説明をお願いします

○倉本室長

資料3について説明をさせていただきます。

こちらが若者のUターンの状況ということで、鳥取県が調査されました調査結果を基に作成した資料でございます。県外に進学した大学生の県内就職率ということで、昨年の実績を見ますとUターン率が32.8%、約3割という状況になっております。この3割をどう考えるかということですが、県外大学生の約7割の学生さんがUターンを希望されているというアンケート調査結果が出ております。7割の希望があるにもかかわらず実際には3割ぐらしか帰ってきておられないという状況ですので、このギャップをいかに埋めていくかということが大きな課題だと考えております。本市としても様々な取組をしているところでありますけれども、なかでも若者の地元定着を進めていくために、ふるさと教育の推進が必要であると考えているところでございます。

○金川教育委員会次長

続きまして、資料4についてご説明致します。

平成27年度に「ふるさと米子の先人に学ぶ郷土資料集」を作成いたしました。米子には優れた先人が多数おられることを子ども達に知ってもらい、その偉人から自分の進むべき道を見つけていくということも含めて活用しております。主に道徳の時間に活用しております。学校と協同して活用の研究をしているところです。学校において、ふるさと教育に関する事で申しますと、小学校の低学年で町探検という形で校区のいろいろな特色や歴史を勉強していくという機会をどの学校でも設けております。それから、全ての学校ではありませんが、総合的な学習の中で、校区の方に来ていただいて話を聞いたり、中学校では文化祭等と絡めて、地元の企業・産業・歴史について調査し、結果を展示するという形で、校区の方に見ていただく機会も持っております。

加茂小学校の例が資料に出ておりますが、先般、米子市の魅力を知るということで学校の方から要望がありまして、市の方で子ども達に米子市の魅力を伝えて欲しいということで、出前授業を行いました。その後、個々にその魅力に関して、グループに分かれて市の各部署を訪ね、職員から説明を受ける機会を設けております。このほか、明道小学校でPTAの方も協力されて、米子市のことを知る、ということで夏休み中に有志で市役所を訪ねて聞き取りなども行われております。今後さらに、小中学校の方でふるさと教育という部

分で、子ども達が郷土の良さを知るといふ取り組みを進めていかななくてはならないと考えております。

○伊木市長

最初に私の方からですけれども、このテーマを掲げた問題意識というものが、今資料3にありましたけれども、県外に若者が流出していくということが今まで言われてきたことです。しかしながら、鳥取県がアンケートを取ってみますと、7割が戻りたいという希望を持ちつつも3割しか結果的に戻ってきていない、ここに4割のギャップがあるということで、このギャップを何とかしなければいけないなと思ったわけです。

つまり100%全員戻ってきてほしいということでは決してなくて、せめて地元で就職を希望する人にとっては、ちゃんとその希望が成し遂げられるようにできないかなと思ったわけです。しかし、実際なぜ都会企業に就職するかといえば、地元企業との競争の中で、例えば初任給の額面ですとか、福利厚生だとか条件面での戦いになると、どうしても地元の中小企業では勝負にならないというところがあります。この差はしかしながら、地元企業で働いている人はなぜ地元企業で働いたんだろうということを考えた時に、実は単純に給与額面だけでは考えていなくて、例えば米子の生活、海や山があつて自然豊かなこの米子の生活が好きだから、この地で仕事をしているという方は結構いらっしゃるんです。地元で就職をしているということは、結局そういうところを選択しているんだろうなと思った時に、やはり子ども達に、地元の良さとか、地元の誇り、先ほどシビックプライドという言葉が出てきたかもしれませんが、日本語で言えばまちの誇りと言うか、市民としての誇り、これをある程度身につけていただいて、県外に行っていただく、それが大事なのかなと思っています。ふるさと教育につきましては資料4にもありますとおり、教育委員会の方で大変工夫をしていただいて、限られた時間ではありますけれども、やっていたいておりますが、これをもっと充実していただかなければならないと考えています。

これは余談ですけれども、県内のとある施設で、担当していた職員さんと話をしましたら、その方がたまたま山口の出身の方だったんですね。ある歴史系の施設だったんですね。山口の人は、何で鳥取の歴史を子ども達に教えないんですか」と言うんですね。山口の人は維新の、例えば高杉晋作であるとか、あの辺の英雄の話を子ども達に教えるんだと言われて、はっと気が付きました。やはり地元にも英雄、世に出た人はたくさんおられますので、そうした人たちのことを知って、地元で就職するなり、世界に飛び出してゆく。そのことが大切なのかなと思います。確かに山口県では政治家でも、総理大臣になる人が多いですけれども、脈々と維新の志というのを引き継いでいるんですね。今回賛否両論出ましたけれども、安倍首相が鹿児島で出馬表明するんですよ。ただ少なくとも、山口出身の安倍首相の心持ちには、維新から、日本の国は山口が引っ張ってきたんだというプライドがあるんですよ。そういうのが見え隠れするんですよ。そこまででないにしても、何らかの地元の誇りというものを子ども達が身につけて、社会に巣立って行ってほしいという、この事をどういう風に充実したらいいのかっていうのを議題にして、皆さんからご意見をいただきたいと思っています。

○金山委員

今おっしゃった郷土を誇れる子どもは、ぜひ作っていかないといけないと思います。先ほどありました、米子市の郷土資料の授業を見ていると、本当に、もっと早くやるべきだったなと思いますし、さらに充実させていきたいです。こういった郷土を誇れる偉人ということもありますし、例えば、イモトとか辛坊治郎とか、地元出身の人気のある者呼んできて、モデル像をこれにするとか、何らかの工夫が必要かなと思います。

それともう一つ、ご存知のように、平成27年に経済産業省の発表で、米子市が暮らしやすさ日本一と評価されました。資料を色々見ますと、米子は教育含め医療もそうですし、文化芸術施設、十分にコンパクトにまとまっているということもございます。この米子市の暮らしやすさについて、切り口を考えながら、もう少し魅力を訴えていかないといけないかなと思いました。また、これは教育委員会だけではなくて、経済部門や観光部門などあると思いますけれども、是非連携して一緒に発案していくということが必要かなと考えます。

○伊木市長

偉人とともに、自然環境の豊かさだとか、それから医療や福祉の充実ですとか、評価されているわけですが、意外と知られてないのが、バス停の近さというのがありまして、実は、車社会・米子ですがそういったところを国の方から評価されております。やはり見づらい部分について、評価されていることをちゃんと工夫して子ども達にも教えられるように、教育委員会だけではなくて観光部局であるとか、それぞれの部局の力を結集して、教育委員会に対して教材が提供できるように考えたいと思います。

○上森委員

自分が育ったところに自信や誇りを持てる子どもを作り上げる、そういう環境でなければならぬなというところなんです。

25年前に、米子市内の小学校5校を集めてサミットが開催されました。その時に、まちの自慢・課題について、それぞれが研究をしたものを持ち寄って、自信高らかに子ども達が発表していました。そういうことを経験して教育委員にならせていただいて、学校からそれぞれ教育目標を示していただいたときに、具体的な教育目標というところが、なかなかできていないと感じました。自分の校区の自慢、例えば弓ヶ浜であれば「いただき」、これは全国に誇れる文化的な食材ですよ、それを大切にしていこうといったように、具体的に学校の教育目標にするということを学校がしていかないといけないのではないかな。子どもは少し大きな単位の集団に行った時に萎縮してしまいます。全国に誇れるんだと、中学校・高校大きなグローバル的な社会に出た時に自信が持てるような勉強をしていく、そうしたことで、「ふるさとの先人に学ぶ」という資料ができて良かったなという思いがしています。

これは教育委員会だけで作っているのだから、米子市として、そういうものを作っていくことによって、子ども達が自信を持って、都会に出た子が、米子にまた帰って来るといった環境を作らなければならないなと、それが経営者としてもなかなかやっぱり県外の大学生を雇うことが、なかなかできない現実があるんですけども、言われたような住みやすさとか、いろんなものを含めて生活をできる環境を、部の垣根もとっばらって、そうしたこと

も考えられるような行政になると、たくさんの方がここに帰ってきて、良い米子市になるのではないかと思います。

○杵村委員

若者のUターンに関しては、戻りたいのに戻れない現実がある。これは教育面だけではなくて、観光面や経済面の連携した取組が大事だと思います。ふるさと教育なんです、道徳の副読本を子ども達に渡す前に見せていただきましたら、本当に知らないことがたくさんあって、これは子どもの前に大人でしょう、大人が知らないことは子どもに伝えることができないよ、と思いました。ぜひこの本を、大人の目に行くような体制、あるいは機会を頂きたいと思います。

うちの子の学校で県外から来ている学生さんがたくさんいて、その子たちがよく家に来るんです。何で米子に来たのと聞くと、いろんな事情で来ているんですが、来て良かったかと聞いたら、すごく暮らしやすい、という声がありました。学生というのは、フットワークが軽いので、どこにでも行きます。そうすると、学校の合間に、勉強の合間に、スキーに行ったり、ヨット部も学校から直に行ることができます。そういう恵まれたなかで、卒業したらどうするか聞いたら、残りたいていう子が多いんですね。じゃあその子たちが外に米子のアピールをしてくれたらどうでしょうか。出て行った子を帰すのも大事だし、来た子をそのまま残すのも、とても大事な、ふるさと教育にもつながるのかなと思っています。

シビックプライドの出前授業は、さぞかし楽しい授業だったんだと思います。そういう機会は本当に素晴らしいと思います。大人に言うと子どもに伝わるし、子どもに言うと大人にも伝わります。どんどん出前授業に行って、それを続けていただきたいです。

大阪城の城主は知っているけど、米子城の城主を知らないという現実の中で、今米子城をアピールなさっている。これをひとつのチャンスだと思って、大きな題材だと思っているので 発信していただくといいかなと思っています。

○伊木市長

今、八幡次長が授業をしたというのがありましたけれども、ここで使った資料をベースにして、これをブラッシュアップしながら、使っていけるようなものに、より充実していければという風に思いますし、学生さんがこちらに来られた時に、勉強はもちろん頑張っていたかなければならないんですけども、地域の生活を楽しんでいただいて、暮らし全般を楽しんでいただくという観点も発信できるのは、多分米子だろうなと私はそう思っておりますので、それは責任もってやりたいなと思っております。

○荒川委員

Uターンの就職について、企業誘致ですとか、企業の支援がすごく大切だと思うので、米子市全体でお願いしたいと思うのと、ふるさと教育については、学校での教育はもちろんそうなんです、米子市中全てがふるさと教育になっていると、私自身は思っていました、例えば最近米子城が、木の伐採等によって、街の中からすごく良く見えていまして、これを毎日見て、子ども達がどう思って大きくなっていくのかな、楽しみだなっていう思

いですとか、水鳥公園の様子だとか、小さい頃にいろんな行事があつて、そこに行ったなとか、大山がこうだとか、日々の暮らしがすべてふるさと教育だと思っています。学校教育においては、切れ目のない支援体制があつたりとか、おいしい給食があつたりだとか、一人一人のとどく授業していただいたり、声かけをいただいたり、こちらも毎日の全部がふるさと教育だと思っています。

先日PTAの高校の全国大会で、佐賀県に伺った時に唐津の商工会議所の会頭さんが講演でおっしゃっていたのが、そこで学んだ人が将来何をするかということがとても大切ですよというお話でした。確かに、今は気付かなくても小さい時にいろんな場所でいろんな大人から受けた恩恵を、いつか米子に戻ってきて、返してくれる日が来ると思うので、学校教育にとどまらず、全ての環境が整っていくことだったり、ひとつひとつの積み重ねがふるさと教育になっているんじゃないかなと感じました。特に自分自身も県外から来てまして、米子の良い所ってどこだろうと思った時に、こちらに来て地引き網を初めて体験したんですが、そういったことも海がないとできないことですよね。小さい時はそれに気付かないかもしれないんだけど、経験だつたりとか日々の暮らしの中で、ふるさと教育というのができていくんじゃないかなと思うので、学校教育のなかで、米子市の行政のなかで、両方でふるさと教育をどんどん押し進めていただいて、子どもが大きくなって継いでくれたらなという風に感じております。

○伊木市長

お話の中で米子にいらなくても外に出て米子に返してくれる、というのがあつたと思うんですけれども、私はこの話をする時にあえて、全員帰ってくる必要はないんですよ、という言い方をします。今70%が帰って来たいと思っていますけれども、必ずしもこれを100%にする必要はなくて、残り30%ないしはそれ以上の人たちが、米子から全国へ飛び出しているような活躍をしてくれる、これも非常に一つの誇りになると思いますし、それでいつか米子に、恩返しをしてくれるというのも非常に大切なことだと思うんです。いずれにしてもベースになるのはふるさと教育なんだろうと思います。地元に残りたいと思うのもふるさと教育でしょうし、また地元を飛び出していく、全国各地あるいは世界に飛び出して行っても、その行った先で、米子の事を思い出して、何かあつた時には一肌脱いでくれる、これも大事なことだと思っています。その辺りも毎日の生活がふるさと教育になるということは、我々もよく認識しながら事を進めていきたいなというふうに考えております。

そうしますと 教育長からお話を聞きたいと思います。

○浦林教育長

昨日の市長の部屋のメッセージで、確かにそうだなと思ったのが、まず米子に住んでいる人自身が米子のことを十分に理解できていないということ、それからもう一つはそのことは知っているけれども、それが素晴らしいことだとか価値のある事だという意識づけができていない。だから、どんなことがあります、ということは言えるけれども、それが自慢だつたり誇りだつたりっていうところが一段登れていないというか、できてない部分というのが大人もだと思ひますし、子どももだと思ひます。

たとえば自分たちが大きな会に出て、鳥取ですと言って、米子ですと言って、まっすぐ手を上げられるかということ、歳とともにできるようになってきましたけれども、若い頃はなかなかできなかったなという思いがあります。最近では米子の代表みたいに喋らせてもらう機会があるので、めいっぱい、そこでどれだけ自慢できるかという思いで喋っておりますけれども、そういった価値付けみたいなことが子ども達に、大人にもそうですけれども、できたらいいなと思います。

ですから、今ある色々な教育、ふるさと教育の資料のような何か一つのパッケージのようなもの、またはそれが価値のあるものをぎゅっと、皆が共通理解をして、子ども達とか大人が語っていくような、そういったものは何か一つ作り上げていく、組み合わせていくことが必要なのかなと思います。

私が校長をしていた時に、この学校の卒業生に何か思い出を一個残せるなら何がいいかなと思って、卒業式の時に、6年生の保護者の方もいるわけですが、地元出身の菅田栄治さん、この本にも出ておりますが、この学校の卒業生ですと、みんなのこんな近くにそんなすごい人がいるからみんなも夢を持って、みたいな話ができそうです。

よその偉人を引き合いにして言うこともあるでしょうけど、地元の身近な方を校長自身が言うことで、ぐっと色付けをするような、それを米子全体として共通理解できる部分みたいな、何かそういった部分を作り上げていくことを、今後考えていかないといけないと皆さんのお話を聞いて感じました。

○伊木市長

そうしますと3番目のテーマに移らせていただきたいと思います。

「教職員の多忙感の解消について」ですが、私も市長となった立場上、市民の皆様からいろんな形で、特に教育については様々な提言をいただきました。こういったご意見のひとつひとつには一理も二理もあると思っておりますけれども、実は皆さん方もよくご存知のとおり、学校現場の実情として、先生方はカリキュラムを消化するのに大変な努力と工夫を凝らしていらっしゃいます。そうしたなかで、極めて限られた時間の中で、ふるさと教育もそんなですけれども、様々なことを消化しなきゃいけないと。この事を放置しては本当の教育の充実というのはないのではないかと、究極私はそう思っているところです。

金山委員が担任をされていた頃は、「海岸に集合」とか言って、朝、釣り大会をしたりとか、非常に自由に、またいろんなことができていた時代だったと思います。今の先生方は「管理」とか「危険」とかそういうことがやりづらいたらうなという風に思って、思い描いた教師像に今の先生方がなれているかな、と思うと分からないところがあります。そこでやはり何らかの工夫を施して、教職員の皆さんの「多忙感」とあえて「感」を入れていきますけれども、多忙である事がイコールだめだとそうでは決してなくて、多忙であっても充実感を得ることがございますので、やはりその中身なんだろうと思います。例えば、あまりやりたくない事務的な報告書をあげよ、とかですなそういったことで忙しいと、充実感を感じず、多忙感となってしまうと。だけど、子どものことで色々知恵を絞って、話し合いで深夜に及んだ、なんてなると多忙だけでも充実感をということがあるかもしれません。何か工夫によって多忙感が充実感になるような、そんな事が出来ないかと、ちょっ

と漠然としておりますけれども、皆さん方にいろいろご意見をいただければと思っております。事務局より、資料5の説明をお願いします。

○金川学校教育課長

多忙感の解消ということで、まだ完全なことはできておりませんが、今年度より全国で初めてになりますが、全県で統一した学校業務支援システムを導入しております。色々な業務を一元化・簡素化するというものです。これにつきましては、学校の方でも共通で使えるものですので、便利な部分がたくさんできているという報告も受けておりますし、県内の転校等につきましても、この電子化されたものでできますので、その辺りも簡素化されているということがあります。また、モデル的に行っておりますが、教員業務アシスタントということで教職員の業務のアシスタントをする方を住吉小学校に配置して、その検証を行っているところです。この活用についてはこれから検討されていくところです。そして、中学校の部活動について、休養の日を設けるということが始まったところですが、米子市においては平日週一回は休むということを原則にしております。国の方から部活動のあり方のガイドラインが出ておりますが、今後、市の方でも示す予定にしております。

主な業務内容等を資料に挙げておりますが、生徒指導ですとか保護者対応ですとか、色々な関係機関からの調査、協力要請等がかなりの量来ております。その辺りも教員業務を膨らませている部分になると思っております。教育委員会でもそのあたりの依頼等も厳選して、断られるものは断ってという形をしておりますが、まだこれからさらに改善していく必要があるというふうに考えております。

○伊木市長

例えば鳥取県教育委員会で開発しました学校業務支援システム、これには私も非常に期待をしております。今までいろんなデータや資料がバラバラだったものを、なるべく一元管理というようなシステムを作っていただいたということで、こうしたこと通じながら教職員の負担を軽減していくということでございました。そういったことを含めまして、皆様の方から何か意見がございますでしょうか。

○金山委員

子ども達のために教職員が時間を厭わずやっているという実態があつて、子どものためといえば家庭もなげうって、というような時代がありました。私自身はそうでしたけど、やはり家庭もありますし、考え方を変えていかないといけないと思います。社会の変化にきちんと対応していくような、能率化と言いますか、我々も昔は手書きでやってましたけれども、今はパソコンで絵もかける、通信もできる、そういったことを考えますと、能率化はしたんでしょう。

ただ能率化だけでは無理なところがいっぱいございますので、それはやっぱり、例えば予算で人員の確保が必要ではないでしょうか。今、県の教員業務アシスタントとか学校支援システムとかございますけれども、まだまだ手が足りていないというような、支援がいる学級や学校があります。そういった中で、今米子市が大変力を入れていただいている、にこにこサポート支援事業、これは各学校本当に効果的に使わせていただいているところ

です。例えばいま住吉小に配置されている、教員業務アシスタントはかなり有効なわけですが、あくまでも住吉小学校だけですので、私が校長時代一番助かったのはここにこそサポート支援事業でした。単市の予算で見ていただいて、本当に嬉しかったのを覚えています。人員っていうのは財政が関わる大変なことですが、是非ともそういった配置について、充実というのを今後お願いできたらと思います。

○上森委員

勤務時間外の平均業務時間数を見てみると、教員に関しては残業代ゼロです。その代わりというところで4パーセントぐらい法律で守られています。この資料にあるような時間外の業務について、これを4パーセントで補填をしながら、全く追いつかないのが数字的にはそういう状況となっています。

出雲・松江・米子・鳥取の教育予算を見比べたことがあるんですけど、教育予算は市の予算に対して、一概には言えないですけど、8.8パーセントぐらいの時期があって、その時に米子市なんかは12.6パーセントくらいあったというようなことがあって、本当に米子市は少ない予算で、教育行政の最低限の学力を保障に関して本当によく頑張っておられるなと思います。例えば全国学力のテストなんて言うと、やっぱり鳥取県の中でも上の方、ずっと一番っていうんですかね、他の市よりも高かったっていうのは、やっぱり先生方が決められた予算の中で、本当に頑張って子ども達に教育をしていただいているなっていうことを思いました。その数字だけ見ると、頑張っておられるなと、その内容を見るとほとんどが人件費と固定費で、新しいことをするための予算というはずとなかったですね。それを今言われたような先の人件費に投資するのか、何をするのか米子全体で審議を含めて理解をして頂きながら、予算というものをぜひとも少しずつでもいいですから、集中的に配分していただけたらと思います。

○伊木市長

そのあたり、財政と相談しながら考えていきたいと思います。何が一番お金をかけるべきかと言った時に、教育であることは間違いないことだと思いますので、ただ、全体のバランスを見ながら考えたいと思っています。

○荒川委員

ズバリ、予算がないなかで、厳しいのかなと思いました。今回の資料を拝見して、切れ目のない支援とかふるさと教育とか、いいことがいっぱい始まってきています、継続もされています。そして先生はどんどん忙しくなります。多忙感よりも充実感である面と、単純に多忙で疲弊されている部分もあると思います。

いろんなことを見直すということが非常に大切だと思います。やめる勇気と言いますか、新しいことを始めたら、全部を続けていたら、それは忙しくなりますよね。今までなんとなくやってきたことを再検証といいますか、やめる勇気も必要だと思います。

しかし最も必要なのは予算かな、と思います。子ども達のために、大切なのは教育であり、十分な人的配置のためには予算が必要だと思うので、それはお願いしたいなと思いました。

○伊木市長

自分の公約にも教育運営関係の予算の充実というのを掲げています。特に現場の先生方の意見で、ちょっとした備品が買えないという意見もありました。必要なものは、充実させていかなければならないということで書かしていただきました。

実際問題どれだけ足りないかっていうのは、実は学校の現場のそれぞれの裁量もあるようでして、そこでもう少し工夫の余地はあるのかなと思っています。予算の部分は決して度外視しているわけではないんですけども、この多忙感について特に精査してほしいと思うところは、言い過ぎになるかもしれませんが、これまで様々な問題が、何かにつけて学校に押し付けられたと、あれは学校の問題、これも学校の問題、先生は何してる？というような感じで、先生も子どもが関わる問題になるとどうしても関わっていきやいけない、特に、本当は地域で解決しなきゃいけないことが学校に来る、その辺の仕分けがないまま、なんでもかんでも学校が課題を受け入れてきた過去がありはしないか、あると断定はしませんけれども、そこら辺の検証が必要なのではないかと思います。

これはやっぱり地域に返さなきゃいけないんじゃないか、あるいは家庭でやるべきことがあるんじゃないか、その辺の役割分担をしないと、あらゆる青少年の課題が学校に来る現状がある。教育委員会としても、なにか動かないといけない、アンケート・報告書を上げよ、みたいなのですね、そういうような循環があるんじゃないかと、そこら辺を精査しないと、いたずらに予算を増やすことでカバーしようとする、問題を上塗りしてしまうようなところもあるでしょう。

重ねて申し上げますけれども、一番大事な投資は何かというと、教育だと私は思っていますので、その教育予算を強化すること自体が、全くその通りだと、私も思っていますが、中身を精査したうえで、本来あるべきところにはしっかりとつける。逆に、これはもうやらなくていいのではというようなことがあれば、これはしっかりと議論して、見直します。

○荒川委員

今おっしゃったことは、まさにそのとおりで、家庭ですべきことが、いっぱいやるのが学校に押し寄せて来て、すべて先生方に負担が行っているというのも事実だと思っていて、予算をつけていただいて、先生方の人数的なところが何とかなればと思いました。

その先に見据えるのは、やっぱり今学校にいる子が、しっかりした教育を受けて、子育てをする世代にうまくなっていくんじゃないかな、という希望感はずごくありまして、ですから将来の米子を考えた時に、子育てとか教育ですとか、勉強だけではなくて人としての力、生活力みたいなことが、とても大切だなと、そして、その子たちが大きくなって子育てする世代になったときに、そのまた子ども達が、米子で教育を受けて良くなっていけばとすごく思っています。

○金山委員

先ほど市長さんから言っていたいたんですが、理解されていたら、日曜日に海に集合って言えるんですかね。もとになるのは、教員の多忙というより多忙感で、地域や家庭に

理解されていないという不安感というものがある。もし地域や家庭できちんと連携ができていたら忙しくても多忙感ではなくて、多忙ですむ。そのあたり、教員が疲れているのは多忙感のほうかなと思いました。

そういったなかで、家庭地域連携いろんな形があるんですけども、昨日、教育新聞を読んでいたら、ふるさと教育とも関連するんですが、東京の方である事例があって、幼保老連携、幼稚園保育園と地域の自治会、老人クラブかは分からないですけども、そういう連携で地域の子ども達で、最後には、自分の地域が良かったなあ、帰りたいなあいうことを感じるような取組を今やっているようです。詳細はよく分かりませんが、発想の転換も必要かなとひとつ思いました。

○伊木市長

地域との連携となりますと、学校だけの問題ではなくて、市長部局で所管しております自治会とかですね、共管という形ですけども公民館、そういうところの出番であれば、市長部局としても何らかの協力ができるんじゃないかと思っていますし、実際具体的に地域でも大人たちが率先して、学校と関わろうとしている動きがあることは聞いています。

そのあたり、もう少し地域を取り込んで、学校の先生にも理解されていない不安感というのであれば、解消を図りたいと思っています。

○上森委員

地域の関わりってということですけども、米子市はそれが公民館・校区にあって、そのなかで子どもを育てるといような環境があって、学校の中での協議会を作っていたら、どう地域として教育していけるかというようなことも話して、定着はしているから、もう一つ進めてですね、多忙感をなくすために、たとえば民間の力をなんか活かさないか、事務局にもお願いしたいところなんですけど、民間の人で人材的に役立てられないかとかボランティア、そうした人たちも随分役に立つのではないかと思います。そういうことがあれば、経済人の中にもたくさんおられますので、活用していただきたいなと思います。また、体験学習として小学校中学校が、職場体験を企業としても受け入れているんですけども、ああいうのを学校の中で、学習だけではなくて体験を通した学習を充実させていってもらいたいと思います。

○杵村委員

教員意識改革として、先生というのは神聖であること、それから自己犠牲をするものという考えを持ったなかで、日々の活動に奮闘されている先生が多いと思います。

働き方改革は、先生・教師という仕事では、もう自分は無理っていう意識を自分でどこかもっていらっしゃるかもしれない。文科省がコーディネーターを各学校に派遣して、働き方改革を率先して進めようとする動きがあります。米子市でも、コーディネーターという言い方がいいかどうかは分かりませんが、他のやり方でいいところは教育の現場でも反映させて、コーディネーターや教育委員会の立場があるかもしれないし、誰か専門的な方かもしれないけれども、新しい風で、長く学校にいたことが、勤めていることが、いいことではないよっていうことをぶつけていってくださるような機関とか人がいるのかなと

思いました。

地域や家庭でできることは限られますが、家庭の親から言うと、学校を理解してあげないといけない、先生の学校事務の軽減、集金とかお手紙とか地域のこととか、それは自分たちでやるから、という保護者の意識改革、先生たちのサポーターになってほしいなと思います。ひいては、コミュニティスクールのあり方にも繋がってくるのかなって思います。

○伊木市長

ありがとうございます。そうしますと、教育長からご意見ありますでしょうか。

○浦林教育長

いろんなことを学校は頼まれるし、子どもが関わるのでどんどん増えてきた。25年くらい前に、このままではパンクするっていうことで行事の見直しとか、例えば春の運動会と秋の運動会と、昔はあったんですけども、春をやめたりだとか、なんとか時間を産んできましたが、その要望される量は相変わらず、むしろさらにスピードアップして、今を迎えている状況だと思います。そこで、市や県もそういった調査とか出来るだけ減らすようにしようと、そういった努力はしていますけれども、社会のニーズにあるもので、一定程度の量はしょうがない、そういったところが現状だと思います。

それで、学校業務支援システムを入れていただいて、共通化することによって、余分なことをしなくてよくなって、同じ成果が上がっていることが、ひとつこの4月から始まりました。幅広く教員がやっている仕事で、みんながしなくても、米子市の誰か一人がすることによって、多くの人が恩恵を受けられる。例えばプリント一つ作るにしても、誰か作ったものを使えばいいですけど、みんなが自分で作っている。そうすると100学級あると100人が作っている状況になる。小さなことの積み重ねで起きている今の多忙感を、小さなことの積み重ねで、少しでも減らせないかというのが、ひとつの現実的な話です。

そのことによって、これまで教員がこの今の状態から、少し減らしてほしいんですけども、どうやっても、いろいろ来るから無理だとか難しいと思ってる部分があると思うんです。あきらめ感とまでは言いませんけど、受け入れてしまっているところもあるので、こういったやり方をすればこの部分が減ったというような、成功体験と言ったら変ですけども、やればできるんじゃないかという、これはできたなということの一つ二つと広げていくことで、少し、考え方・働き方改革も進むのではないかと、そういった中で、今ご意見のあった保護者の協力とか地域の協力っていうのがやれるのではないかと思います。

地域や保護者の人が協力してくれることはありがたいですけど、その調整とかで、ものすごい時間がかかるということで、学校としては痛しかゆしみたいなところもあります。でもその後に、こういうふうにやればみ易いじゃないかという考えがもし広がってくれば、仕分けと言いますか、見極めみたいなのをしていこうという雰囲気には繋げないかなという思いです。精神的な部分みたいなのばっかりになってしまったんですけども、やっぱり教員も、やれば少し早く帰れる部分もあるなあと、1個でも自分ができると、確実に一つ進めて、皆様のご提案が生きるんじゃないかという風に思います。そのために教育委員会としても、現場の声を聴きながら、こういうことができるんじゃないかという提案をしていけたらなと思っております。難しいことですけど、がんばっていかないといけな

いと思っています。

○伊木市長

ありがとうございました。今日用意したテーマは以上ですが、皆さんの方から全体を通して疑問などありましたらお願いします。

○荒川委員

切れ目のない支援とか、米子の中で一生懸命していただいているのはうれしいと思うんですけども、高校に行く段階で県とのつながりといいますか、私たちはなかなかそういったチャンスがないんですけども、外に向けて、県教委なり、今後の関係者に向けてスムーズに進学、就職もそうですけれども、中学校を出た先のこともうまくできるように支援していただけたら嬉しいなと思います。

○伊木市長

高校は基本、県教委の所管となりまして、中学と異なりますが、せっかく小中学までやってきた、よい取組は可能な限り高校にも繋げていかないと意味がないということもありますので、是非ともここは、市教委、県教委で連携していけるように我々も注力してまいりたいと思っております。

○上森委員

今回の機構改革の中で、文化観光局を作っていただいて、肝いりの局なんですけど、半年たって、これを改めてどのようにされていくのかを伺いたいです。特に教育委員会のなかから文化課・体育課が市長部局に移りましたので。

○伊木市長

教育委員会からは文化課改め文化振興課、体育課改めスポーツ振興課として市長部局に来いただきました。まず前提として、これまでやってこられたことは、そのまま引き継ぐというのがあります。例えば体育課であれば、市のいろいろな体育行事ですとか、体育関係の大会そういったところの支援などはそのままさせていただくと、ただ、米子の持っている体育、スポーツの魅力っていうのはもっともっとPRしていいんじゃないか、例えばボートとか皆生の海岸でやってるシーカヤックとか、あの手のスポーツはもうレジャーに近いところがあって、ボートはまだまだ協議ですけども、レジャーに近いようなそれこそトライアスロンなんかも競技ですけども、あれですごくたくさんのお客さんがこの地にいらっしゃる、このスポーツの力を通じて地域の活力と活性化に繋げていくためにはもう一工夫、教育委員会だけではなくて市長部局と一緒にあって、むしろ市長部局がリードしてやっていかなきゃいけないということで、市長部局に文化観光局を設置して、そこに迎えたということです。

文化振興課につきましても基本的な考え方は同じでして、これまでやってきた史跡の調査、研究このあたりは引き続き、やっていくということ、ただ今度、新たな課題としては、いかに市民に観光客に分かりやすく伝えるか、史跡の魅力というものを細かく分析するこ

とは当然大事なんですけれども、細かく分析したものをいかに分かりやすく魅力としてPRできるか、ここの勝負は市長部局が担わないといけないということでもってきました。

4月1日にこの体制を始めたんですけれども、今その意識付けというのは随分できてきているというふうに思っております。成果をそれぞれの課に出していただく、これを今いろんな形でフォローしながらやってきております。

そうしますと、本日の議題は以上でございます。

○八幡総合政策課長

おつかれさまでした。

事務局の方からいくつかご連絡をさせていただきたいと思っております。

今回こういう形で、総合教育会議を開催させていただいたんですが、今年度につきましては来年の2月くらいに、もう1回開催させていただきたいと思っております。

議題については、今回この3つの議題を挙げさせていただきましたけれども、委員さんの方から、こういう議題について協議したいとかご要望がありましたら、事務局までご一報いただければと思います。教育の振興を図るための重点的な課題を率直に語っていただく場、ということでこの会議を設けておりますので、そのあたりのご協力をよろしく願います。

そういたしますと、以上で第1回米子市総合政策会議を閉会いたします。

ありがとうございました。

11時45分 閉会